

## アングロ・サクソン期における英語聖書

深 山 祐

### はじめに

我々は、英語聖書の歴史を瞥見するにあたって先ず英語聖書とは何であるかを考えてみなくてはならない。「英語聖書 (The English Bible)」という場合、普通我々は〈英語に翻訳された聖書〉という意味でとらえている。しかしながら、英語聖書の流れの中でもそのはじまりに位置するアングロ・サクソン期 (the Anglo-Saxon period<sup>1)</sup>) にスポットをあててゆこうとする時、このような一般的な意味の枠付けを簡単にあてはめることは困難である。ここで、少し上記の〈英語に翻訳された聖書〉ということからこの時期における英語聖書ということを考えてみたい。

(i) 先ず、我々が〈聖書 (The Bible)〉という時、一般的には、旧新約聖書66巻を指しているということである。<sup>2)</sup>しかしながら、この時期には、聖書全体にわたるものは、未だあらわれず、その全てが聖書を部分的に取り扱ったものばかりである。

(ii) 次に、〈翻訳〉ということであるが、これもこの時期においては問題となる。何故なら、この時期の訳はどれ一つとして今日我々が考える意味での翻訳ではなく、自由訳もしくは翻案であったからである。

(iii) 更に、この時期の〈英語〉は言うまでもなく、アングロ・サクソン語 (Anglo-Saxon) もしくは古代英語 (Old English) といわれるものである。<sup>3)</sup>これは、5・6世紀頃英国に大陸から移り住んだアングロ人、サクソン人、ジュート人達の言語で、Henry Bradley の言葉によれば、<sup>4)</sup>彼らは

「本質的には、同一の言語を話していたが」(though speaking substantially the same language), 彼らが渡って来た時「方言上のそれぞれの特異性」(their peculiarities of dialect)を有していたのであった。更にこれらの種族が英国に定住した地域が異なっていた上、お互いの交流がほとんどない状態が続いたので、元来は僅かの相違しかもっていなかった方言が次第に隔ってゆき、英国移住後3~4世紀も経つと、テムズ河以北で話されていたアングリヤ方言(Anglian), 国の南東のケント方言(Kentish), 国の南西のウエスト・サクソン方言(West-Saxon)の間に、著しい差異が生じていたのである。しかも、このうちアングリヤ方言は、更に二つに分かれ、テムズ河とハムバー河の間の中央平原で話されていたマーシャ方言(Mercian)とハムバー河の北で話されていたノーサンブリア方言[Northumbrian (つまり North-humber ハムバー河の北の意)]との間にも歴然とした差があったのである<sup>5)</sup>。従って、英語といっても、当時のこのような方言も充分考慮してゆかねばならないわけである。(本稿末尾の地図参照)

以上の諸点をふまえた上で、しかもあえて英語聖書の系譜をアングロ・サクソン期にまでさかのぼる場合

(i)については、聖書の一部を取り扱ったものでもよいとし、

(ii)については、自由訳、翻案はもとより、聖書の内容を直接取り扱ったと考えられる宗教詩をも含めて考え、

(iii)の場合には、アングロ・サクソン語によるものであれば、いずれの方言のものでもよいとしなければならない。

## I. キリスト教の伝来

英国にキリスト教を最初に伝えた者が誰れであり、又それが何時頃であったのかは誰れにも答えられない問いである。ただ今日我々が推測し得ることは、紀元43年のローマ軍の英国征服以後、英国にやってきた役人や軍人等の中にいたと思われる個々のキリスト者によって、2世紀頃初めて伝

えられたであろうということである。I. M. プライスによれば、<sup>6)</sup>その進展は、6世紀以前は比較的ゆるやかであったが、アイルランドでは特に深く根を下していった。アイルランドに播かれたこの小さな種子がやがて根づき大きな樹木へと成長して、ついに6世紀には、それはスコットランドとイングランド北部にまでひろがっていった。しかし、その後A. D. 597年、時のローマ教皇グレゴリウス一世 (Gregory I) によって送り出されたアウグスティヌス (Augustine) 以下40人ばかりの一行のケント上陸は、アングロ人、サクソン人、ジュート人等のいわゆるチェートン族の侵入によって、衰微しかかった状態のキリスト教に新しい息吹きを与えることになった。グレゴリウス一世がアウグスティヌス一行をイングランドへ派遣した<sup>7)</sup>動機として伝えられている話は、グレゴリウス一世が教皇になる前のこと、ローマの市場に他の商品の間に売り物として置かれている少年達を見たことから始まる。少年達は、身体が白く、美しい顔立ちで、その髪の毛はすばらしいものであった。そこでグレゴリウスは、彼らがアングル人と呼ばれる種族であると聞いて、アングル (Angle) はエンジェル (angel : 天使) に似た彼らの顔だちにふさわしい名前であり、このような者達は天にいますお使いの相続者になるのにふさわしいといい、後に教皇になってから彼は、このような英国伝道の事業を敢行したのであった。アウグスティヌス達の働きによってイングランドの伝道は成功し、とりわけイングランド南部の伝道はいちじるしい進展を示した。

### § 1. ラテン語聖書による伝道

英国におけるキリスト教のいちじるしい進展は、主に、福音 (Gospel) の活発な宣教を通じてもたらされた。ほとんど少数のものしか字が読めず、それ以上に聖書の写本も数が少なかった。従って、聖書の示す福音を広める最も効果的で且つ、早い方法はキリスト教会の伝道者達によって直接語ってゆくことであった。当時、カトリック教会は、神聖な言葉であるラテン語のウルガタ聖書 (Vulgate) を使用することを命じ、それを卑俗な土地

の言葉にかえることは冒瀆的であるという考えで、翻訳をなすという環境にはなかった。それゆえ、各地を歩く説教者達は、ラテン語聖書を聞き手の言葉に直し、真理を解き明かしたのである。

## § 2. 絵画・彫刻に表われた聖書

このように聖書の福音は、イングランドの人々にその土地の言葉で直接語られ、伝えられた。しかし、F.F. ブルースの考えによれば<sup>8)</sup>、こうした英語での福音の説教は、英語聖書のはじまりとはなり得ないという。説教という時間的に制約を受けるものではなく、より持続的なものでなければならぬというのである。人々に聖書を教えるための手段として、より恒久的な媒体は、例えば壁画とかレリーフの彫刻という教会建築の装飾であった。具体的には、7世紀に Wilfrid は York の教会に、Benedict Biscop は Wearmouth の教会に、それらの装飾を施した。これと時期をほぼ同じくするものとして Iona 島と Lindisfarne 島の間古い巡礼路にあたり、スコットランド南西部とイングランド北西部の間に位置するアイルランド海の入江 Solway Firth の近くに 紀元 8 世紀の前半に建てられたものと推定される十字架 Ruthwell Cross には、福音書の出来事を描き出す幾つかのパネルが彫られている。それぞれのパネルの絵の下には、ラテン語聖書 Vulgate のテキストの一節が刻まれている。しかし、ラテン語を読めない旅人は、パネルの絵をよく見て、描かれた出来事の意味を考えることが出来た。この Ruthwell Cross には、更に最大の OE. 詩の一つ *The Dream of the Rood* (『十字架の夢』) の一部が古代ゲルマンのルーン文字 (runes) で刻まれている。それ故、「Ruthwell の十字架は、異教ゲルマンの文化とキリスト教ローマ文化とが結びつき融け合った一つの表われと見ることができる。アングロ・サクソン人の文化は、要するにこの二つの系統の文化が触れて融け合ったものである<sup>9)</sup>」との主張にうなずける。

ほぼ同じ時期に属するものとして他に二つの十字架が、やはり巡礼の道沿いの Cumberland の Bewcastle と Northumberland の Hexham Abbey

にそれぞれ建てられてある。これらの十字架は全て、北緯55度線上にある。

## II. OE. 宗教詩

### § 1. キャドモン (Caedmon, ? ~680)

Bede (673~735) の『英国民教会史』(*Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*) の第4巻第24章の記述によれば、<sup>10)</sup>ノーサンブリア (Northumbria) のホイットビー (Whitby) の修道院に非常に優れた敬虔な宗教詩を作る一人のブラザーがいた。彼は、以前はこの修道院で家畜の世話係であり、しかもそれまで彼は詩を作ることなど学んだことがなかった。さて修道院では時々、食事の際の楽しみとしてみんなが堅琴に合わせて、順番に歌うことが求められたりした。そのような場合、彼は堅琴が自分の方に近づいて来るのを見ると食卓から立ち上がり、自分の住いに帰ってしまうのであった。

ある時、彼はいつものように夕食後の楽しみの席を中座して家畜小屋に行った。その晩は、丁度家畜の世話をまかせられていたからである。そして彼はその家畜小屋で眠りに落ちてしまった。眠りの中で、彼のそばに一人の男が立ち、彼に挨拶し、それから彼の名を呼んで「キャドモン (Caedmon) よ、わたしのために何か歌ってくれ」と言った。けれども彼は答えて「わたしは歌うすべを知りません。わたしは歌うことができなかったからこそ、そのために食事の席から抜け出てここに引き込んだのですから」と言った。彼と話した男は、再び「けれども、あなたはわたしのために歌うのだ」と言った。彼は「何を歌うのか」と言い返すと、男は「造られたものの始まりについて歌え」と言った。すると、直ちに彼は創造主なる神をほめたたえて、彼自身それまで決して聞いたこともない歌を歌い始めた。その歌は、当時イングランドで色々な方言に直され、<sup>11)</sup>流布されたが、OE. のノーサンブリア方言の原詩によれば次の通りである。

Nū scylun hergan      hefaenrīcaes uard  
metudæs maecti      end his mōdgidanc,

uerc uuldurfadur    suē hē uundra gihuuæs,  
 ēci dryctin,    ōr astelidæ;  
 hē āērist scōp    aelda barnum  
 heben til hrōfe,    hāleg scepen,  
 thā middungeard    moncynnæs uard;  
 ēci dryctin    æfter tiadæ  
 firum foldu,    frēa allmectig.

ついでに、F. F. ブルースによるこの詩の現代訳をみると<sup>12)</sup>；——

Now must we praise  
 The Maker of the heavenly realm,  
 The Creator's power and wisdom,  
 The deeds of the Father of glory;  
 How He, being God eternal,  
 Was the Author of all wonders,  
 Who first to the sons of men  
 Made heaven for the roof of their abode,  
 And then created the earth,  
 Almighty Guardian of mankind ……

更にこの詩の私訳を試みると

(今ぞ我ら天国の造り主、  
 創造主のみ力とその叡智、  
 栄光の父のみ業、  
 永遠にいます神の奇蹟の  
 ことごとのなされしさまを  
 ほめたたえん。  
 造り主は人の子等のため先ず  
 住いのおおいとして天を造りなし、

次に地を造り給えり

全能にいます人類の守護者は……)

眠りから覚めた時、彼は夢の中で歌ったことをことごとく覚えており、更に同じ調子でもっと多くの神をほめたたえるにふさわしい歌を付け加えた。朝になって修道院の仲間へ、突然、彼が神より詩的天賦の賜物が与えられたことに驚き、彼に聖書の物語あるいは教えについて聞かせ、出来るなら、これを詩に歌ってみよう彼に勧めた。彼は、その仕事を引き受けたが、翌朝皆んなの前で、大変立派な歌にしたのを朗読した。その結果、彼は説得され、修道院の中でもっと彼にふさわしい地位を与えられ、修道僧の一人として加えられた。それは、彼が更に聖書の物語や教えを韻文に移すことをしてもらったためであった。今日のある学者の評言によると「彼は、聖書の物語を聞き、黙想し、その後それをきわめて、込み入った言い回しと韻律の形式でもって、自国語の詩に言い表わすことが出来た<sup>13)</sup>」ということである。Bedeによれば、Caedmonは聖書の内容を自分に教えてくれる教師達を、逆に自分の聞き手にしてしまう程、非常に魅力のある歌に変えたのである。このようにして、彼が歌った主題は、宇宙創造、人類の起源、創世記の全ての歴史、イスラエルの民のエジプトからの脱出と約束の地に入ること、その他、聖書の数々の歴史的物語、次に主の受肉、受難、復活、昇天、聖霊の到来と使徒達の説教、そして来るべき審判の恐ろしさ、地獄の苦しみの恐怖、天国の至福、更に神の恩恵と審判についての数々であった。それによって人々を、悪しき行いに傾きやすい思いから引き離し、逆に良き業を愛し、それを熱心に求めるよう人々を振り立たせることを目的とした。こうして Caedmon は、与えられた詩の天分を生かして聖書の内容を自国民に知らせることをした<sup>14)</sup>のである。

では次に、これを聞き、受けとめた当時のアングロ・サクソンの人々の反応はどうであったであろうか。Caedmonの詩の影響に対する Bede 自身の評価は、「彼の詩によって多くの者の心は、しばしば俗世間に対する蔑視と天国へのあこがれとを燃え上がらせた。イギリス国民の中で、彼以

後にも他に宗教詩を作ることを試みた者がいたが、いずれも彼に匹敵するものは<sup>15)</sup>なかった」という非常に高いものである。更に、既に我々が見てきた天地創造に関する詩の他に、Bede によって挙げられた Caedmon の詩の目録と、部分的ではあるが、非常に照応し、且つ Caedmonian poems として、Oxford の Bodleian Library に保存されている *Genesis, Exodus, Daniel, Christ and Satan* という4篇の OE. 詩の存在が知られているが、それらは今日確実に Caedmon の作として認められうることは、難かしいと言われている。しかし、それらの詩が、Caedmon 及びその後継者達の業績を映し出す例証に十分なり得ることは確かであろう。これら一連の詩についてジェフリ・シェパードは「それらは多くの点で博識のある詩で、言葉もよく練られている。それらは、聞きやすいという意味では人々の受けがよかったとは言い難い。言葉づかいは凝っており、叙述の理解は困難で、引喩は時にかけ離れていることがある。しかし、そのような詩がイングランドのあちこちに流布され、模倣され、幾世紀もの間、筆写されていたことも確かなことである」と語っているが、この言葉は、Caedmon の詩にもほぼ等しくあてはめられうるであろう。更に、先に引用した Caedmon 自身が神の助けによって初めて作ったといわれる詩について、英語史的観点から見て厨川氏の言うように「OE. 詩の常套的語句が、常套的な使用方法で、無暗に同格で重複<sup>17)</sup>されている」と考えられるにもかかわらず、そこに含まれている詩句が「Caedmon 以後 OE. 詩に頻繁に用いられた<sup>18)</sup>」という事実をも考え合わせる時、我々が抱く素朴な疑問は、「それでは、そのような詩が何故人々の間に広く行き渡り、模倣され、長い間筆写されていたのか」ということである。

このことは、当時のアングロ・サクソン人の聖書に対する思考方法と深く関わった事柄と言えよう。ジェフリ・シェパードによれば、当時のアングロ・サクソン人は、聖書の物語を決して<sup>19)</sup>比喩的に (metaphorically) は受け取らなかったことである。つまり彼らにとって「聖書は、本質的に預言者的であり、隠された知恵を神の靈感によってあきらかにさせることであ



った。預言者的思考様式は、アングロ・サクソン人に受け入れられた<sup>19)</sup>と述べ、彼らが聖書の語りかけを、他ならぬ自分達への語りかけとして受け止めたことを明らかにしている。つまり、当時の人々は聖書に示された真理の言葉を彼ら自身の魂の養い、滋養として受け取り、かつて彼処の出来事を今ここでの出来事としたのであった。

## §2. キュネウルフ (Cynewulf, 8c後半～9c初め)

8世紀後半から9世紀の初めにかけて Anglian 方言地域の人として生きていたと言われる Cynewulf は、その全ての作品において宗教的な題材を取り扱っているが、その中でも Sir Herbert Grierson によって、“a noble poem<sup>20)</sup>”と言われた *Crist* (=Christ) の作品は、聖書の内容を取り扱った宗教詩で〈キリストの降臨〉〈キリスト昇天〉〈最後の審判〉の三部から成る長篇詩である。ジェフリ・シェパードは、Caedmon がその作品の中に直截に聖書の内容を盛り込んでいるのに対し、Cynewulf の作品は聖書の内容を敬虔な詩形へと洗練させていると評しており<sup>21)</sup>、更に、W. P. Ker によれば、彼は非常に念入りに詩作をなすので、よく注意して彼の詩にむかわなければならないことを述べている<sup>22)</sup>。

## III. 聖書の OE. 訳

### §1. アルドヘルム (Aldhelm, 640?～709)

以上述べた聖書の内容を韻文の形に意識したも<sup>23)</sup>のから、聖書のテキストを直接翻訳した作品に目を向けると、我々が出会う最初の名は、Aldhelm である。I. M. プライスによると、彼は Malmesbury の修道院長であったが、普通の説教によっては多くの人々をほとんどひきつけないとみてとって、吟遊詩人の服装を身につけ、多くの人々が必ず通る橋の上に場所を占め、ハーブによる巧みな演奏によって一団の聞き手達を引きつけた。こうして、彼は聴衆を集めるとすぐにその音楽や話を宗教的な出し物に変えた。

そして、その驚くべき楽器の旋律と、説得力をおびた魅力ある言葉によって多くの人々をキリスト教に帰依させた。

彼は後に Dorset の Sherborne の初代司教となったが、彼は詩篇をアングロ・サクソン語に翻訳した最初に知られた人物であると言われている。彼がこの訳業をなし遂げたのは紀元 700 年に入って間もなくのことであった。今日、何人かの専門家達によって、Aldhelm の詩篇であると考えられている写本がパリにあるが、しかしこの資料は、11世紀に書かれたもので彼の生きた時代より後代に属する跡をとどめている。

§ 2. 尊敬すべきビード (Venerabilis Beda, 英語では Venerable Bede,  
673~735)<sup>24)</sup>

この時期の最も有名な学者であった Bede は、8世紀の西ヨーロッパでの最も光輝く人物と言われている。彼は、8世紀から12世紀にかけて輩出した聖書の翻訳者達の系譜の最初に位置するとも言われている。彼の弟子の一人カスパート (Cuthbert) は、この Jarrow の修道士の臨床の物語を我々に書き残している。735年キリストの昇天日の前日 (Ascension Eve) 即ち3月25日の朝から Bede は、残り一章となったヨハネの福音書の翻訳を筆写させていた。なぜなら彼は、次のように語ったのである。「私が死んだ後、私の子供達 (つまり修道士達) が誤って聖書を読んだり、何の目的も持たずに働いてはしくない。」この偉大な学者は、死の間際に臨んで肉体の衰えを覚えつつ、しかも修道院の兄弟達に別れを告げることによって妨げられたが、ひねもす苦痛の内に翻訳を続けたのである。夕方が近づいた時、そのすすり泣く筆記者が上体をまげてささやいて言った。「先生、あと一節だけです。」そうしたら Bede は言った。「急いで書きなさい。」筆記者は言われた通りに続けて書き、そして言った。「はい、先生 (master)、今、終わりました。」「そうだ、そのとおり、今、全てが終わった。」それから Bede の要請で修道院の仲間、彼を寝室の床に横たえた。そして彼は、長い献身の生涯の間、非常に忠実に仕えてきた愛する主 (Master) にグロ

リア (Gloria) を唱えながら息をひきとった。しかしながら、彼の翻訳のうち残されたものは何もない。おそらく、Northumbria がデーン人によって荒廃させられた時、ノーサンブリアの他の多くの貴重な品々と共に破壊されてしまったと思われる。翻訳の出典は、不確かなものである。当然、当時の西ヨーロッパ全体を通じて用いられたラテン語のウルガタと人は考えるかもしれない。しかし Bede は、ギリシャ語の知識ももっていた。もし彼が、ギリシャ語原典から実際に翻訳していたならば、彼の翻訳はさらに多くの歴史的意義を帯びることになる。いずれにせよ、その形成期にあった英国のキリスト教に対する彼の影響は、看過されてはならない。

### §3. アルフレッド大王 (King Alfred, 848~901)<sup>25)</sup>

その当時、宗教と聖書の学問の最大の保護者の一人は、Alfred 大王であった。彼の名は、その臣民が知的にも道徳的にも幸せになるように日夜心砕いた王という点で英国王の中でも最も優れた王として知られる。キリスト教は衰微しかけていたが、彼はたちまちのうちにそれに新しい生命を吹き入れ、聖書の使用に新しい刺激を与えた。彼は、その真の価値を強く確信していたので十戒 (Ten Commandments) を訳した。否、訳させられたと言った方がより正確であろう。彼は、国の法律の冒頭にこの十戒を置いた。十戒の他に更に、彼はモーセ五書 (Pentateuch) から、他の法律をも加えた。彼の活動は、ここで止まらなかった。なぜなら彼は自らを Aldhelm や Bede の系列にある者としてみなしていたようである。彼は、詩篇の翻訳をなすために助けとなったといわれている。この作品の現存するものはないが、British Museum にある写本は「Alfred 大王の詩篇」という名を冠している。それは、行間英訳付きラテン語テキストの写本である。しかし、今ではそれは、11世紀に属するものとされている。しかしながら700年頃に書かれたと考えられているもう一つのラテン語の詩篇が British Museum にあるが、それは9世紀の終り頃 Kent 方言で逐語訳をともなっている。

## § 4. 二つの行間訳（リンディスファーン福音書とラッシュワース福音書）

この同じ時期は、最古の現存する福音書の英訳を生み出したと考えられる。我々は、普通福音書が最初に翻訳されたであろうと思うかも知れないが、Bede のヨハネによる福音書の翻訳は別にして、今述べた詩篇より古い訳はない。British Museum 所蔵のコットン写本の一つは、7世紀末頃 Lindisfarne の司教 Eadfrith によって筆写された全福音書のラテン語訳である。これは、大司教 Theodore の友 Adrian が 669年に英国に持ってきていたテキストからの写しである。950年頃、司祭 Aldred は、このラテン語訳の行間にアングロ・サクソン語の意識を書き入れた。これは、これまで知られる最古の四福音書の英訳である。そしてそれは、Northumbria の方言で書かれている。このテキストは、「リンディスファーン福音書」（“*The Lindisfarne Gospels*”）、「ダラムの福音書」（“*The Book of Durham*”）、「聖カスバートの福音書」（“*The Gospels of St. Cuthbert*”）の名として、今では知られている。この写本は George Steiner が “a sumptuous manuscript” と呼んだ<sup>27)</sup>程、テキストのすばらしいさし絵ゆえに有名である。

次に、Oxford の The Bodleian Library には、「ラッシュワース福音書」“*The Rushworth Gospels*”<sup>28)</sup>として知られるもう一つの行間書き込みの写本が所蔵されている。この福音書は、*The Lindisfarne Gospels* より後になって、Yorkshire の Harewood にて作られ、その行間訳は、北部マーシャ方言によって書かれているが、その訳は先の *The Lindisfarne Gospels* に、負うている部分が多い。この二つの福音書 *The Rushworth Gospels* と、*The Lindisfarne Gospels* は、Anglo-Saxon の北方方言の見本として、貴重な価値を有しているものであり、且つ、10世紀における少なくともイングランド北部でのラテン語の修得水準を示すものとされている。

§ 5. 福音書の West-Saxon 方言訳<sup>29)</sup>

上の行間訳と同じ頃、もしくは少し後の時期に、四福音書のウェスト・

サクソン語への翻訳がラテン語の正しい知識と、ウエスト・サクソン語の充分に使いこなせる能力を持つ一人、もしくは数人の学者の手によってなされた。文体と語彙が少しずつ違っていることにより、マタイがある一人の翻訳者の手になり、マルコとルカが、他の者の手になり、ヨハネが更に別な第三の訳者の手になることがわかる。いずれにせよ、翻訳は首尾一貫して正しく、明解な簡潔な文体であり、その時代に属するものとして保存されていることから明らかなように、11世紀にはかなり流布されていたようである。2冊の後代の写本（12世紀後半のもの）は、この訳に相変わらずひき続いて関心があることを示している。読みやすい形で翻訳したいという願いのあらわれであると思われるいちじるしい語形変化を示していることから、この作品は言語学的に見ても貴重なものである。これらの福音書は、印刷された最初の Anglo-Saxon 語の本の一つで、1571年という早い時期に *‘The Gospels of the four Evangelistes, translated in the olde Saxons tyme out of Latin into the vulgare toung of the Saxons,’* というタイトルで、John Foxe の編集で出版されている。

#### § 6. エルフリック (Aelfric, 955?<sup>30)</sup>~1020)

このような学問的にみて正確な翻訳の遂行は、あきらかに 960 年頃ベネディクト派の影響の下に始まったイングランド南部の文芸復興 (the revival of learning) の一つの結実であった。この文芸復興は、アングロ・サクソン文学の分野において、修道院長 Aelfric の働きにその頂点をみた。彼の広範囲にわたる著作は、旧約聖書のかかなりの部分の翻訳と説教集を含んでいた。彼の文体は、明快で一般読者向きであった。説教集 (homilies) では、士師記、列王記、ヨブ記、エステル記、ユデト書、マカベヤ書からの、かなりの部分の内容を要約したり、自由に訳出したのみでなく、儀式のきまりや名前の列挙という一般の人々の興味を引かない細部の部分だけを省きモーセ六書 (the Hexateuch) の大部分を翻訳した。ユデト書とマカベヤ書とは、デーン人の侵入に対して、同国人達の愛国精神を燃やすために含ま

れていたようである。Aelfric の作品の興味を引く点は、彼自ら語っているように、彼はその翻訳において、より古い訳を利用したということである。しかしながら、これまでのところ、彼が用いたと思われる作品は見い出されない。今日、そのような訳が欠けているということは、デーン人が英国に対してなした恐るべき破壊と、ノルマン人の略奪によってもたらされた荒廃のためであろう。Aelfric の作品のうち現存するものとして Oxford に一冊、British Museum に一冊それぞれ稿本がある。

31)  
 アングロ・サクソン期の終焉——おわりに代えて

1066年のノルマン人の英国征服によって、アングロ・サクソン語は退けられ、代ってアングロ・ノルマン語 (the Anglo-Norman) の登場をみるのである。Anglo-Saxon 語は、王の布告により、宮廷や書物や学校から追放され、その結果この言語は、修道院に閉じ籠っている修道士、司祭、更には農夫達の間にもその避難場を見出し得たのであり、従って表面にみえない形で生息し続けるのであった。それと対照的に征服者達によってもたらされ、王の布告により権威づけられた新しい言葉は、ゆっくりではあるが、次第にこの国に侵透していったのである。その結果生じた言葉の混乱は、13世紀まで文学の名に値いする何かを生み出す妨げとなった。聖書の翻訳活動は、この時期、ほとんど止まってしまったのである。

注

- 1) ここで、アングロ・サクソン期とは、古代英語、アングロ・サクソン語が話されていた時代で、だいたい7世紀末から12世紀中頃までをさす。
- 2) 旧新約聖書の66巻は、言うまでもなく正典 (canon) として定められた枠組であるが、Latin Vulgate と密接なつながりのあるこの期の英語聖書についてみてゆく場合、この66巻の枠組を越えて考えなければならないであろう。というのは、この期に属する宗教詩として外典 (apocrypha) の「ユデト書」 (“Judith”) が存在するが、これはユデト書が Vulgate の中で歴史書の一つとして含まれているためであると考えられるからである。
- 3) かつては、大体アングロ・サクソン語は、ドイツなどの大陸の学者が、古代

英語は英国の学者が使った名称とされていたが、最近ではほとんどの学者が古代英語の方を用いる傾向にある。

- 4) Henry Bradley, *The Making of English* (Seibido, 1959) p. 23
- 5) この区分は、フェルナン・モセ (Fernand Mossé) 著 (郡司, 岡田共訳) 『英語史概説』 (*Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*) (開文社, 昭和41年) 19頁に従った。
- 6) Ira Maurice Price, *The Ancestry of Our English Bible* (Harper & Brothers, New York, 1956) p. 225.
- 7) この話は、Venerable Bede がラテン語で書いた *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* 第2巻第1章に出てくる。本稿では、英訳 *Bede's Ecclesiastical History of the English Nation* (Everyman's Library, 1965) p. 64 によった。  
なお、ベータ (長友訳) 『イギリス教会史』 (創文社, 昭和40年) の邦訳もある。
- 8) F. F. Bruce, *The English Bible* (Lutterworth Press London, 1970) p. 1~2.
- 9) 厨川文夫著 『中世の英文学と英語』 (研究社, 昭和39年) 6頁。なお、この Ruthwell は [rɪvɪ] と発音することに注意。
- 10) Bede, *op. cit.*, pp. 205~208.
- 11) *Three Northumbrian Poems*, (Edited by A. H. Smith, Methuen, 1933) p. 38, p. 40
- 12) F. F. Bruce, *op. cit.*, pp. 2~3.
- 13) Geoffrey Shepherd, (Edited by G. W. Lampe) *The Cambridge History of the Bible*, vol II (Cambridge University Press, 1969) p. 367.
- 14) Bede, *op. cit.*, p. 207.
- 15) *Ibid.*, p. 206.
- 16) Geoffrey Shepherd, *op. cit.*, p. 368.
- 17) 厨川文夫, 前掲書, 80頁。
- 18) 同上, 81頁。
- 19) Geoffrey Shepherd, *op. cit.*, p. 368.
- 20) Sir Herbert Grierson, *The English Bible* (Collins, 1947) p. 7.
- 21) Geoffrey Shepherd, *op. cit.*, p. 369.
- 22) W. P. Ker, *Medieval English Literature* (Oxford University Press & Maruzen Co. Limited, 1967) pp. 37~38.
- 23) Ira Maurice Price, *op. cit.*, p. 226.
- 24) *Ibid.*, pp. 226~227 (Cf. F. F. Bruce, *op. cit.*, p. 6)
- 25) *Ibid.*, p. 227.

- 26) *Ibid.*, pp. 227~228.
- 27) George Steiner, *Language and Silence* (Atheneum, New York, 1967) p. 188.
- 28) Sir William A. Craigie (Edited by H. Wheeler Robinson) *The Bible: In Its Ancient and English Versions* (Oxford University Press, 1940) p. 130; I. M. Price, *op. cit.*, p. 228.
- 29) Sir William A. Craigie, *op. cit.*, pp. 130~131.
- 30) *Ibid.*, pp. 131~134; Ira Maurice Price *op. cit.*, pp. 228~229.
- 31) Sir Herbert Grierson, *op. cit.*, p. 7; Ira Maurice Price, *op. cit.*, p. 229; F. F. Bruce, *op. cit.*, pp. 9~10.

### 古代英語の諸方言

